

第16回「チーム医療症例検討会」を開催しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2023年2月18日（土）、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにて、第16回「チーム医療症例検討会」を開催。健育会グループの全国にある病院施設から合わせて19題の症例発表を行いました。

「チーム医療症例検討会」は、健育会グループでもっとも歴史のある発表会です。第16回目となる今年は湘南慶育病院主催のもと、コロナウイルス感染症の蔓延以降3年ぶりの現地開催で今回は慶應義塾大学のご好意により、湘南藤沢キャンパス内にある講堂をお借りしての実施となりました。

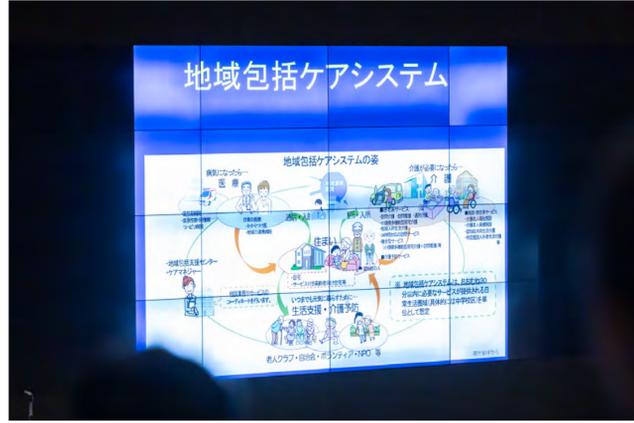
前半の発表は、介護部門から10施設、後半は病院部門から9施設の症例発表と質疑応答がそれぞれ行われました。その様子をお伝えいたします。

はじめに、主催した湘南慶育病院の鈴木則宏院長から挨拶がありました。



3年ぶりの現地開催となる第16回チーム医療症例検討会を、この藤沢の地で開催できることを大変嬉しく思います。チーム医療症例検討会は、健育会グループの中で「ミラクル賞」、「キラキラ介護賞」を受賞した各病院施設の症例を発表し合い、ディスカッションを行う非常に重要な勉強会です。ぜひ熱心なディスカッションを繰り広げて頂きたいと思います。またこの場を借りて、協力くださった慶應義塾大学の関係者の方々にお礼申し上げます。

特別講演では、医療法人徳洲会・湘南鎌倉総合病院で、脳血管障害予防センター長を務める森貴久先生にご登壇いただきました。



「脳卒中患者に必要な地域連携の構築」というテーマのもと、チーム医療の重要性についてお話しいただきました。さらに日本の医療の現状、医療者や立法、政府が目指すもの、さらに地域医療の種類とその中で医療施設の診療報酬がどのようにして決まっているか、診療報酬と現場スタッフの関係、湘南鎌倉総合病院などの急性期病院で行っている治療内容、そして最後に地域医療連携についてのお考えについて詳しく解説いただきました。

また、私からは以下のような挨拶を行いました。



森先生、素晴らしい講演をありがとうございました。自分のやりたい医療が病院の発展、ひいては地域医療の発展に結びつくという自覚を持って指導されていることは素晴らしいと感じました。そのようなドクターが集まっていることが、日本最大の医療法人で、最大の利益を出している徳洲会グループの強みなのだと思います。経営者として非常に勉強になりました。

そして森先生のお話にあったように、チーム医療の大切さは本日発表される「キラキラ介護賞」「ミラクル賞」のなかにも見られると思います。我々健育会のチームは、病院・施設のスタッフだけでなく、患者さん、ご利用者さん、ご家族も一員となり、チーム全体で取り組んでいます。前半に紹介する介護部門の「キラキラ介護賞」は、まさにチームで愛情を持って親身な対応ができた結果ご利用者の輝く笑顔がみられた実例です。

また後半に紹介する医療部門の「ミラクル賞」は、常識を超えて改善した症例です。医療人であるドクター、ナース、セラピストはみな、科学者です。科学的に考え、探究心とチャレンジ精神を持って、諦めずに「なんとか患者さんに良くなってもらいたい」とチーム全員で頑張った結果です。1年間、本当にご苦労様でした。また明日からチームの一員として、奇跡的な回復を目指すべく業務に邁進してください。それでは発表を楽しみにしています。

前半の座長は、湘徳大学短期大学部の亀山幸吉特任教授が務められました。



まずは介護部門10チームによる症例発表です。入居者さんに愛情を持ってワンチームで寄り添ったケア事例の発表を行いました。



**「勲章を付けて写真を撮りたい」～ひ孫がくれた
生きる希望～**

ライフケアガーデン湘南
ケアワーカー 清水良太



**ハーフ食の導入について
～生活の質の確保とチャレンジの大切さ～**

特別養護老人ホーム ケアポート板橋
介護福祉士 藤嶋 望奈未



**広がった世界～60年ぶりに家の外へ出た
症例について～**

介護老人保健施設 しおさい
ケアワーカー 鈴木 由佳



笑顔で食事を楽しめるように

ケアセンターけやき
介護福祉士 関口 翔



**余命 1～2 週間と宣告され自宅退院した症例
～もう一度絵を描きたい～**

登米ひまわり訪問看護ステーション
看護師 佐々木 理恵



看取り期からの回復

介護老人保健施設 ライフサポートねりま
介護福祉士 大石 浩行



笑顔あふれる生活

ライフケアガーデン熱川
介護福祉士 板垣 悠



enjoy！ 施設生活

介護老人保健施設 しおん
介護福祉士 今野 智裕



終末期ケアから通常プランへの実現

喬成会介護事業部 ナース イン 花びりか
介護福祉士 柏野 敬子



5年ぶりの音楽ライブ鑑賞を目標に 歩行能力の改善が図れた症例

介護老人保健施設 ライフサポートひなた
理学療法士 黒川 良輔



前半の発表を終えて、亀山名誉教授から丁寧な講評をいただきました。

①ライフケアガーデン湘南

臨床心理学者のシェリー・タークルは、家族がいても家庭がない孤独の問題を、現代社会の大きな社会的問題だと提示しました。家族がいてもコロナ渦でオアシスを失っている事例は多いと思いますが、この症例はそこに一石を投じたプラス思考の症例だと思います。

②ケアポート板橋

1996年に放映されたドキュメンタリー番組「ゆっぴいのぼんそうこう」で、脳の90%が機能せず、嚥下障害で専門家に経口接種は難しいと診断された子が、車椅子の座位を30度傾斜すれば食事ができると気づいた例に通ずると思いました。リハビリの方々とチームを組んで学んだ素晴らしい事例です。

③しおさい

以前私がいた重度障害者施設で「生きている間にスイスの山に行きたい」という障害者がいました。そこで私の同行を前提にドイツのロマンチック街道を観光。彼は母親が作った着物と草履、腰巻きを着用していたことから、一緒に写真撮りたいという外国人が多く現れて人気者になり、彼はすっかり自信を持ちました。今回の症例のように積極的に外出し、母親の好きだった文化的活動に積極的に関わり、自叙伝を制作されて人生を全うされました。

④ケアセンターけやき

この症例実践は、2001年にWHOが改訂したICFの思想に関連していると感じました。ICFは国際障害分類ではなく、国際生活機能分類であり、個人因子と環境因子を見極めて、この障害のように本人の希望を重視して生活支援を展開しています。また環境因子には、人的、物的、社会的な環境の3つの視点が定義されており、今回の症例はそれらの視点を踏まえた優れた内容になっていたと思います。



⑤登米ひまわり訪問看護ステーション

著名な詩画家・星野富弘さんは中学の体育教師時代に鉄棒から落下して頸椎を損傷。寝たきり生活になり、人生に絶望して自殺を考えましたが、リハ病棟で車いすに乗りながら口に筆を加えて絵をかいている人を見て、自分にもできるかもしれないと思い、それが今日の星野さんを生んだと思います。

⑥ライフサポートねりま

リハビリテーションで国際的評価の高い我が国の先駆者である上田敏先生は「リハビリを単なる手足の機能回復にとどめず、全人間的復権がリハビリの本来の思想である」とは指摘されました。上田先生は、看取り期であろうと最後まで人間としての生活を支援し、生きることを追求されました。その考えを改めて教えられた症例だったと思います。

⑦ライフケアガーデン熱川

デンマークの社会運動家バンク・ミケルセンは、障害者にごく当たり前の生活を保障する福祉の原則「ノーマライゼーションの理念」を提示しました。現在残念ながら福祉施設や精神病院で起きている虐待などの事件は、まさに反ノーマライゼーションの考え方が根源となった管理的な統制が問題なのではないでしょうか。



⑧しおん

10数年前、京都府のある有料老人ホームから介護困難で移された女性がいました。私がお会いした時は意欲喪失され、暗い表情でしたが、新しく入った彼女は利用者の自治会で役員選挙に立候補させられ、壇上で立候補の挨拶をすると往年の経験が蘇り、皆さんの拍手をしっかりと受け止めて自信を回復されました。さらに利用者さんの信頼を受けて副会長に選ばれてまとめ役になり、最初のことが嘘のように回復された例があります。

⑨ナース イン 花ぴりか

健育会の理念でもあるプロフェッショナルの追及は、可能性の哲学であり、諦めないことだと思います。そういう点で福祉の第一戦で活躍される一番ヶ瀬康子先生のお考えと大変共通していると思いました。改めて健育会の未来の実践に生かしてほしいと思います。

⑩ライフサポートひなた

現在深夜に放送されている「リエゾン」という医療ドラマで、患者さんについて単なる客観的な情報にとどめずに、本人の痛みを共有しなければ本来の自立は困難であるということが描かれています。リエゾンは、フランス語で連携や絆という意味で、まさに今回のチーム医療のテーマと関連します。

今回の症例をぜひそれぞれの職場で活かしていただきたいと思います。ありがとうございました。



後半は湘南慶育病院の鈴木則宏院長が座長を務めました。

病院部門の9チームから、病院のケアにより重度の病状から見事な回復を遂げることができた希少な症例が発表されました。

発表《後半》



心肺停止による低酸素脳症後、 全介助の状態から屋外歩行を獲得した症例

石川島記念病院

理学療法士 滝沢 凜



脳出血後の重度障害から自宅退院し、 復職が可能となった一症例

花川病院

理学療法士 往田 幸生



親子の絆を守り離職も防いだ脳梗塞を発症した 症例

西伊豆健育会病院

理学療法士 加藤 耕一



多職種アプローチにより塾講師への復帰を果たした 事例

石巻健育会病院

理学療法士 磯部 望美



職場復帰を目指し、 通勤とリモートワークの獲得を目指した症例

湘南慶育病院

作業療法士 落合 俊太



**親身な対応の実践により
不穏が改善し独居での自宅退院に至った症例**

いわき湯本病院

理学療法士 菅野 有



意識障害、高次脳機能障害を呈し食物認知困難であつた重度脳卒中患者が3食経口自己摂取を獲得し自宅退院に至った経験 ～家族を含めたチーム医療の実践～

竹川病院

言語聴覚士 遠藤 結香



早期の経口摂取獲得により栄養状態が改善され自宅復帰に至った症例～病棟との連携を通じて～

熱川温泉病院

言語聴覚士 土屋 裕美



重症急性硬膜下血腫を呈した超高齢女性に対し、積極的なチームアプローチを行った結果、食事や家族交流に著明な改善を認めた一症例

ねりま健育会病院

作業療法士 松本 優貴



全発表後には、鈴木院長より講評をいただきました。

全体を通して、右側の脳の病変症例が多かったと思います。左側の障害に比べて、右側は劣位半球ですので言語障害等は起こりませんが、空間認識や病態失認など特殊な症状が起こりやすくなります。これは治りそうで治らない、リハビリテーションにとっては非常に厄介な障害ですが、これらの困難を乗り越えて見事に回復したという症例が今日は非常に多かったと思います。本当に勉強になりました。



最後に今回主催した湘南慶育病院の鈴木院長から、次回の主催を引き継ぐ竹川病院の田中院長へ、成功の鍵の受け渡しが行われ、湘南慶育病院の間山文博マネージングディレクターによる閉会の挨拶で無事発表会は終了しました。

今回の発表では、介護部門、医療部門ともにワンチームで諦めずに取り組み、素晴らしい結果を残した症例が多く発表されました。大変誇らしいことだと感じています。引き続き、チーム医療の重要性を再認識し、日々の業務に取り組んでもらえることを期待しています。